

県英研が小中高接続の要！そして課題は？

福井県英語研究会副会長

大久保 昌 倫

英語教育の小中高接続は全国で声高に叫ばれていますが、福井県は小中高でよく連携が取れており、さらに三者の接続もスムーズだと言われています。その背景には福井県英語研究会の存在が大きく関わっていることは明らかです。小中高の全員の会員名簿が作られ、会報が配られる県はそう多くはないはずです。そして小中高間の教員の異動の多さも大きな要因と考えられます。

夏に、東京で全国から英語科教員が集まる会が開催され、他県の方から、「小中高接続の基本概念としてそれぞれの教員が意識すべきことは何か」と尋ねられました。その日の早朝、皇居の周囲をランニングしたこともあったと思いますが、私はランニングを例に挙げ、話をしました。

小学校は大休み、昼休みの校庭での"かけっこ"をイメージしてもらいました。児童がそれぞれ笑顔で思い思いに校庭を走り回っている。その子どもたちのなかに担任の先生も入っています。先生の役割は"かけっこ"を怪我しないように、全員が楽しい思いでいられるように、また、児童の手を取り、いっしょに走り、仲間の輪に入れるように気を配るなど全体をコーディネートすることです。中学校は体育の授業をイメージします。より速く走るための走り方を身につけさせる、持久走のペース配分の重要さを考えさせる、リレーではバトンパスを何度も繰り返させる。このようにして走ることの基礎基本を教えます。高校はまさに陸上競技のイメージです。例えば、ハードルの越え方、高跳びの跳躍の仕方など陸上の専門知識を身につけさせる。それによって、今後のスプリンター、ハードラー、ジャンパーとして能力を開花することにつなげます。期せずして12月に大学の先生と話をしたときにも、その先生もランニングを例に挙げていらっしやっ。

毎年夏、東海北陸7県9地区が持ち回りで開催する東海北陸公立中学校英語研究大会が40年以上続いています。この大会名が来年度からは東海北陸公立学校英語研究大会と名称を改め、小学校も多数参加する会となります。しかし、令和3年度の福井大会では、企画・運営・研究発表において小学校の参加は見送られました。多忙化解消のうねりの中、このような研究会が多忙化の要因のように思われがちですが、福井大会では従来の大会2日間開催を1日開催に短縮しました。福井県の英語教育の発展と教員の働き方改革とのバランスを考慮しながら、遠くない将来、福井県の小中で東海北陸公立学校英語教育研究会を創りあげていけたらと思います。

小中間の教員の異動を考えると、中学校から小学校勤務になる教員は毎年一定数います。中学校勤務になる小学校教諭もいます。ただ、彼らはほぼ3年で小学校に戻っていくようです。逆に、いったん小学校勤務になったら、中学校に戻ることは少ないようです。中高間も同様で



す。高校勤務を希望する中学校教諭の数は圧倒的に中学校勤務を希望する高校教諭の数を上回ります。

中学校英語教育の現場がその影響を受けるのは必然です。中学校英語を背負っていくホープと期待された教員を含め、多くの人が中学校から離れていくとき、彼らの口からしばしば「児童・生徒としっかり向き合いたい」「英語をしたい」との声が聞かれます。生徒指導・部活動で忙しい中学校現場に、働き方改革の風が吹いています。部活の適正化、学校行事削減、業務改善のおかげで、中学校教員は以前と比べたら生徒と向き合える時間、英語をする時間は確実に増えています。

小中高の接続のつなぎ目となる中学校の英語教育はまだまだ研究し、実践しなくてはいけないことが多くあります。小学校、高校の先生方、共に中学校でそれをやってみませんか。

発刊によせて

福井県英語研究会副会長

竹本 俊穂

今年度の英語教育を巡る国の動きとして特筆すべきこととしては、令和2年度から実施される大学入学共通テストへの英語民間検定試験の導入見送りであろう。グローバル時代に対応した人材育成を志向する大学入試改革の目玉の一つとされていたが、文部科学省は11月に「自信を持って受験生に薦められるシステムになっていない」ことから導入見送りを発表した。民間検定試験の導入を巡っては、これまでも家庭の経済力が受験に与える影響（経済格差）や居住地为検定試験の受験機会に与える影響（地域格差）など多くの懸念が指摘されていたので、導入見送りを賢明な判断と見る向きもあろう。

私もその一人ではあるが、一方で、民間検定試験は「読む・聞く・書く・話す」の英語四技能をまんべんなく測れることから、新学習指導要領の目標（英語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらをつなげた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーション能力の育成）を後押しする波及効果（backwash effect）を持ち、評価が変われば授業が変わることから、高校での授業改善を促進する力として働くことを期待していたので、私にとっては少々残念な判断でもあった。

私は、これまで32年間の英語教員生活のうち、約20年間を県英語研究会の研究部でお世話になり、リーディングテスト問題や評価のあり方について考えることが多かった。特に、TEFL委員会では、2年間、話す力を測定するためのテストや評価規準の開発に取り組み、対面式のスピーキングテストを研究したことがある。対面式のスピーキングテストは直接、正確に話す力を測定することができるであろうが、大量の受験生を短時間で評価することが求められる大学入試には明らかに不向きである。その点、タブレット等を活用して多くの受験生の話す力を同時に測定できる民間試験は魅力的であった。

文部科学省は、今後の対応について、民間試験の活用の是非も含めて1年をめぐりに仕組みの抜本的な見直しを議論した上で、令和6年度をめぐりに新たな制度の導入を検討するとしている。本県の先生方は、意見や考えを適切に表現したり伝え合ったりする能力を高めるための言語活動を授業の中で積極的に展開されており、大学入試において書く力や話す力を含めた四技能が評価されることへの抵抗感は少ないのではないかと。令和6年度の新たな制度では何らかの形で書く力や話す力が評価されることを願っている。